

# Tychonoff の定理の別証明

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2014 年 8 月 15 日

Tychonoff の定理の証明については Tychonoff の定理で与えているが，ここでは別証明を二つ紹介する．これらの証明を眺めることで，選択公理に関する事実がいくつか分かる為である．

定義． $X$  を位相空間とする．

1.  $X$  の開集合全体のなす集合を  $\mathcal{O}_X$  で表す．
2.  $X$  の閉集合全体のなす集合を  $\mathcal{A}_X$  で表す．
3.  $X$  がコンパクト

$\iff$  部分集合  $\mathcal{U} \subset \mathcal{O}_X$  が  $X = \bigcup \mathcal{U}$  を満たすならば，ある非負整数  $n$  とある  $U_0, \dots, U_n \in \mathcal{U}$  が存在して  $X = U_0 \cup \dots \cup U_n$ ．

※ 集合  $\mathcal{A}$  に対して  $\bigcup \mathcal{A} := \bigcup_{A \in \mathcal{A}} A$ ,  $\bigcap \mathcal{A} := \bigcap_{A \in \mathcal{A}} A$  である．

4.  $\mathcal{B} \subset \mathcal{O}_X$  が基底  
 $\iff$  任意の開集合  $U \in \mathcal{O}_X$  に対してある部分集合  $\mathcal{C} \subset \mathcal{B}$  が存在して  $U = \bigcup \mathcal{C}$  と書ける．
5.  $\mathcal{F} \subset \mathcal{A}_X$  が有限交差性 (finite intersection property) を持つ  
 $\iff$  任意の整数  $n \geq 0$  と任意の  $F_0, \dots, F_n \in \mathcal{F}$  に対して  $F_0 \cap \dots \cap F_n \neq \emptyset$ ．

コンパクトという条件を考えるとときには，開集合は基底の元のみを考えればよい．即ち，次の補題が成り立つ．

補題 1.  $\mathcal{B}$  を位相空間  $X$  の基底とするとき，  
 $X$  がコンパクト

$\iff$  部分集合  $\mathcal{U} \subset \mathcal{B}$  が  $X = \bigcup \mathcal{U}$  を満たすならば, ある  $n \geq 0$  とある  $U_0, \dots, U_n \in \mathcal{U}$  が存在して  $X = U_0 \cup \dots \cup U_n$ .

証明.  $\implies$  は明らか. 逆  $\impliedby$  を示す.

$\mathcal{U} \subset \mathcal{O}_X$  が  $X = \bigcup \mathcal{U}$  を満たすとする.  $U \in \mathcal{U}$  に対して  $\mathcal{B}_U := \{V \in \mathcal{B} \mid V \subset U\}$  と置けば,  $\mathcal{B}$  が基底であることから  $U = \bigcup \mathcal{B}_U$  が分かる. よって  $\mathcal{V} := \bigcup_{U \in \mathcal{U}} \mathcal{B}_U \subset \mathcal{B}$  と置けば

$X = \bigcup_{U \in \mathcal{U}} U = \bigcup_{U \in \mathcal{U}} \bigcup_{V \in \mathcal{B}_U} V = \bigcup_{V \in \mathcal{V}} V$  だから, 仮定によりある  $V_0, \dots, V_n \in \mathcal{V}$  が存在して  $X = V_0 \cup \dots \cup V_n$  である. このとき各  $0 \leq i \leq n$  について  $V_i \in \mathcal{B}_{U_i}$  となる  $U_i \in \mathcal{U}$  を取れば  $X = U_0 \cup \dots \cup U_n$  である.  $\square$

## 1 Tychonoff の定理の別証明 1

定義.  $X$  を位相空間とする.

1.  $\mathfrak{A} \subset \mathcal{O}_X$  が  $X$  上 admissible

$\iff$  任意の整数  $n \geq 0$  と任意の  $U_0, \dots, U_n \in \mathfrak{A}$  に対して  $U_0 \cup \dots \cup U_n \neq X$ .

2.  $X = \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$  を直積位相空間とすると,

$$\mathcal{B}(X) := \left\{ \prod_{\lambda \in \Lambda} U_\lambda \mid U_\lambda \in \mathcal{O}_{X_\lambda}, \text{ 有限個の } \lambda \in \Lambda \text{ を除いて } U_\lambda = X_\lambda \right\}$$

と置く.  $\mathcal{B}(X)$  は  $X$  の基底である.

3.  $X = \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$  を直積位相空間とすると, 標準射影  $X \rightarrow X_\lambda$  を  $\pi_{X_\lambda}$  で表す.  $\pi_{X_\lambda}$  は連続である.

補題 2. 位相空間  $X$  に対して次の命題は同値.

1.  $X$  がコンパクト

2.  $\mathfrak{A} \subset \mathcal{O}_X$  が  $X$  上 admissible  $\implies \bigcup \mathfrak{A} \neq X$

証明. 対偶を考えればよい.  $\square$

補題 1 を踏まえれば, 条件 2 では  $\mathfrak{A} \subset \mathcal{B}$  としてよいことが分かる.

補題 3.  $X$  をコンパクト位相空間,  $Y$  を位相空間とし,  $\mathfrak{A} \subset \mathcal{B}(X \times Y)$  は  $X \times Y$  上 admissible とする.  $x \in X$  に対して  $\mathfrak{A}_x := \{U \in \mathfrak{A} \mid x \in \pi_X(U)\}$  と置く. このときある

点  $x \in X$  が存在して,  $\pi_Y(\mathfrak{A}_x) := \{\pi_Y(U) \mid U \in \mathfrak{A}_x\}$  は  $Y$  上 admissible となる. このよ  
うな点  $x \in X$  全体からなる集合を  $C(\mathfrak{A})$  と書くと,  $C(\mathfrak{A}) \subset X$  は空でない閉集合である.

証明.  $\mathfrak{A} \subset \mathcal{B}(X \times Y)$  を  $X \times Y$  上 admissible とする.

$$\mathfrak{B} := \left\{ V \in \mathcal{O}_X \mid \begin{array}{l} \text{ある } U_0, \dots, U_n \in \mathfrak{A} \text{ が存在して} \\ V = \pi_X(U_0) \cap \dots \cap \pi_X(U_n) \text{ かつ } Y = \pi_Y(U_0) \cup \dots \cup \pi_Y(U_n) \end{array} \right\}$$

と定めると,  $\mathfrak{B}$  は  $X$  上 admissible である.

∴) admissible でないと仮定すると, ある  $V_0, \dots, V_m \in \mathfrak{B}$  が存在して  $X = V_0 \cup \dots \cup V_m$  と書ける.  $\mathfrak{B}$  の定義から, ある  $U_{i0}, \dots, U_{in_i} \in \mathfrak{A}$  が存在して

$$V_i = \pi_X(U_{i0}) \cap \dots \cap \pi_X(U_{in_i}), Y = \pi_Y(U_{i0}) \cup \dots \cup \pi_Y(U_{in_i})$$

と書ける.  $\mathcal{B}(X \times Y) = \{U_0 \times U_1 \mid U_0 \in \mathcal{O}_X, U_1 \in \mathcal{O}_Y\}$  だったことに注意すると  $V_i \times Y \subset U_{i0} \cup \dots \cup U_{in_i}$  が分かる. よって

$$X \times Y = (V_0 \times Y) \cup \dots \cup (V_m \times Y) = U_{00} \cup \dots \cup U_{mn_m}$$

となり  $\mathfrak{A}$  が  $X \times Y$  上 admissible であることに矛盾.

故に  $X$  のコンパクト性から  $X \neq \bigcup \mathfrak{B}$  である.  $x \in X \setminus \bigcup \mathfrak{B}$  を任意に一つ取ると  $\{\pi_Y(U) \mid U \in \mathfrak{A}_x\}$  は  $Y$  上 admissible である.

∴) 任意の  $\pi_Y(U_0), \dots, \pi_Y(U_n)$  ( $U_i \in \mathfrak{A}_x$ ) を取る.  $V := \pi_X(U_0) \cap \dots \cap \pi_X(U_n)$  と置く.  $U_i \in \mathfrak{A}_x$  だから  $x \in \pi_X(U_i)$ , 故に  $x \in V$  である. 一方  $x$  の取り方により  $V \notin \mathfrak{B}$  でなければならない. よって  $Y \neq \pi_Y(U_0) \cup \dots \cup \pi_Y(U_n)$  が分かる.

$x \in X$  は任意だったから  $X \setminus \bigcup \mathfrak{B} \subset C(\mathfrak{A})$  である.  $X \setminus \bigcup \mathfrak{B} \subsetneq C(\mathfrak{A})$  と仮定する.  $x \in C(\mathfrak{A}) \setminus (X \setminus \bigcup \mathfrak{B}) = C(\mathfrak{A}) \cap \bigcup \mathfrak{B}$  が存在する.  $x \in V$  となる  $V \in \mathfrak{B}$  を取る.  $\mathfrak{B}$  の定義から, ある  $U_0, \dots, U_n \in \mathfrak{A}$  が存在して

$$V = \pi_X(U_0) \cap \dots \cap \pi_X(U_n), Y = \pi_Y(U_0) \cup \dots \cup \pi_Y(U_n)$$

と書ける. すると明らかに  $U_0, \dots, U_n \in \mathfrak{A}_x$  であるから,  $\{\pi_Y(U) \mid U \in \mathfrak{A}_x\}$  が  $Y$  上 admissible であることに矛盾する. 故に  $C(\mathfrak{A}) = X \setminus \bigcup \mathfrak{B} \subset X$  で, これは空でない閉集合である.  $\square$

定理 1.  $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  をコンパクト位相空間の族とする.  $\Lambda$  は整列可能で,  $\bigcup_{\lambda \in \Lambda} (\mathcal{A}_{X_\lambda} \setminus \{\emptyset\})$

は選択関数  $f$  を持つとする. このとき直積位相空間  $\prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$  もコンパクトである.

証明.  $\mathfrak{A} \subset \mathcal{B}(\prod X_\lambda)$  を  $\prod X_\lambda$  上 admissible とする. 補題 2 の条件 2 から  $\prod X_\lambda \neq \bigcup \mathfrak{A}$  を示せばよい. その為に元  $y \in (\prod X_\lambda) \setminus \bigcup \mathfrak{A}$  の存在を示す. 存在が仮定されている選択関数  $f$  を一つ取っておく.

仮定により  $\Lambda$  は整列可能だから,  $\Lambda$  は順序数であるとしてよい.  $|\Lambda| = |\Lambda + 1|$  だから,  $\Lambda$  は後続型順序数としてよい. そこで順序数  $\nu$  を使って  $\Lambda = \nu + 1$  と書く. 同様に,  $\nu$  も後続型順序数としてよい.  $\alpha \leq \nu$  に対して  $Y_\alpha := \prod_{\alpha \leq \beta \leq \nu} X_\beta$  と置く.  $Y_\alpha = X_\alpha \times Y_{\alpha+1}$  である.  $\alpha < \nu$  に関する超限帰納法により, 次を満たす  $x_\alpha \in X_\alpha$  が取れることを示す.

$\alpha \leq \nu$  に対して  $\mathfrak{A}_\alpha := \{U \in \mathfrak{A} \mid \text{任意の } \beta < \alpha \text{ に対して } x_\beta \in \pi_{X_\beta}(U)\}$  と定義する.

このとき  $\alpha < \nu$  に対して  $\pi_{Y_{\alpha+1}}(\mathfrak{A}_{\alpha+1})$  は  $Y_{\alpha+1}$  上 admissible

(i)  $\alpha = 0$  のとき.

$\mathfrak{A}_0 = \mathfrak{A}$  と  $Y_0 = X_0 \times Y_1$  に補題 3 を適用して空でない閉集合  $C_0 := C(\mathfrak{A}) \subset X_0$  を得る.  $x_0 := f(C_0)$  とすれば

$$\mathfrak{A}_1 = \{U \in \mathfrak{A} \mid \text{任意の } \beta < 1 \text{ に対して } x_\beta \in \pi_{X_\beta}(U)\} = \{U \in \mathfrak{A} \mid x_0 \in \pi_{X_0}(U)\}$$

だから,  $C_0$  の取り方により  $\pi_{Y_1}(\mathfrak{A}_1)$  は  $Y_1$  上 admissible である.

(ii)  $\alpha = \beta + 1$  のとき.

$\beta < \alpha$  だから, 帰納法の仮定により  $\pi_{Y_{\beta+1}}(\mathfrak{A}_{\beta+1})$  は  $Y_{\beta+1}$  上 admissible である. 今  $\beta + 1 = \alpha$  だから,  $\pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_\alpha)$  は  $Y_\alpha$  上 admissible となる.  $\pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_\alpha)$  と  $Y_\alpha = X_\alpha \times Y_{\alpha+1}$  に補題 3 を適用して空でない閉集合  $C_\alpha := C(\pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_\alpha)) \subset X_\alpha$  を得る.  $x_\alpha := f(C_\alpha)$  とすれば

$$\begin{aligned} \mathfrak{A}_{\alpha+1} &= \{U \in \mathfrak{A} \mid \text{任意の } \beta < \alpha + 1 \text{ に対して } x_\beta \in \pi_{X_\beta}(U)\} \\ &= \{U \in \mathfrak{A} \mid \text{任意の } \beta < \alpha \text{ に対して } x_\beta \in \pi_{X_\beta}(U)\} \cap \{U \in \mathfrak{A} \mid x_\alpha \in \pi_{X_\alpha}(U)\} \\ &= \mathfrak{A}_\alpha \cap \{U \in \mathfrak{A} \mid x_\alpha \in \pi_{X_\alpha}(U)\} \\ &= \{U \in \mathfrak{A}_\alpha \mid x_\alpha \in \pi_{X_\alpha}(U)\} \end{aligned}$$

だから  $\pi_{X_\alpha} \circ \pi_{Y_\alpha} = \pi_{X_\alpha}$  に気をつけると

$$\begin{aligned} \pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_{\alpha+1}) &= \{\pi_{Y_\alpha}(U) \mid U \in \mathfrak{A}_\alpha, x_\alpha \in \pi_{X_\alpha}(U)\} \\ &= \{\pi_{Y_\alpha}(U) \mid U \in \mathfrak{A}_\alpha, x_\alpha \in \pi_{X_\alpha}(\pi_{Y_\alpha}(U))\} \\ &= \{V \in \pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_\alpha) \mid x_\alpha \in \pi_{X_\alpha}(V)\} \end{aligned}$$

である。よって  $C_\alpha$  の取り方により  $\pi_{Y_{\alpha+1}}(\pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_{\alpha+1}))$  は  $Y_{\alpha+1}$  上 admissible である。今  $\pi_{Y_{\alpha+1}} \circ \pi_{Y_\alpha} = \pi_{Y_{\alpha+1}}$  だから、 $\pi_{Y_{\alpha+1}}(\mathfrak{A}_{\alpha+1})$  は  $Y_{\alpha+1}$  上 admissible であることが分かった。

(iii)  $\alpha$  が極限順序数のとき。

帰納法の仮定により、任意の  $\beta < \alpha$  に対して  $\pi_{Y_{\beta+1}}(\mathfrak{A}_{\beta+1})$  は  $Y_{\beta+1}$  上 admissible である。定義から明らかに  $\mathfrak{A}_\alpha \subset \mathfrak{A}_{\beta+1}$  である。よって  $\pi_{Y_{\beta+1}}(\mathfrak{A}_\alpha)$  は  $Y_{\beta+1}$  上 admissible となる。 $\pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_\alpha)$  は  $Y_\alpha$  上 admissible である。

∴) ある  $U_0, \dots, U_n \in \mathfrak{A}_\alpha$  を使って  $Y_\alpha = \pi_{Y_\alpha}(U_0) \cup \dots \cup \pi_{Y_\alpha}(U_n)$  と書けたと仮定する。 $A := \{\beta < \alpha \mid \text{ある } 0 \leq i \leq n \text{ が存在して } \pi_{X_\beta}(U_i) \neq X_\beta\}$  と置く。各  $U_i$  は  $Y_0$  の基底の元だから、 $A$  は有限集合である。そこで

$$\gamma := \begin{cases} \max A & (A \neq \emptyset \text{ のとき}) \\ 0 & (A = \emptyset \text{ のとき}) \end{cases}$$

と定める。 $Y_{\gamma+1} = \pi_{Y_{\gamma+1}}(U_0) \cup \dots \cup \pi_{Y_{\gamma+1}}(U_n)$  を示せばよい (すると  $\pi_{Y_{\gamma+1}}(\mathfrak{A}_{\gamma+1})$  が  $Y_{\gamma+1}$  上 admissible であることに矛盾し、証明が終わる)。

それを示すため、 $y \in Y_{\gamma+1}$  とする。 $\pi_{Y_\alpha}(y) \in Y_\alpha = \pi_{Y_\alpha}(U_0) \cup \dots \cup \pi_{Y_\alpha}(U_n)$  だから、ある  $0 \leq i \leq n$  が存在して  $\pi_{Y_\alpha}(y) \in \pi_{Y_\alpha}(U_i)$  である。このとき  $\gamma$  の取り方から、 $\gamma < \beta < \alpha$  に対しても  $\pi_{X_\beta}(y) \in X_\beta = \pi_{X_\beta}(U_i)$  である。故に  $y \in \pi_{Y_{\gamma+1}}(U_i)$  が分かる。

そこで  $\pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_\alpha)$  と  $Y_\alpha = X_\alpha \times Y_{\alpha+1}$  に補題 3 を適用して空でない閉集合  $C_\alpha := C(\pi_{Y_\alpha}(\mathfrak{A}_\alpha)) \subset X_\alpha$  を得る。 $x_\alpha := f(C_\alpha)$  とすれば (ii) のときと同様にして  $\pi_{Y_{\alpha+1}}(\mathfrak{A}_{\alpha+1})$  は  $Y_{\alpha+1}$  上 admissible であることが分かる。

(i) (ii) (iii) により  $x_\alpha \in X_\alpha$  ( $\alpha < \nu$ ) が取れた。今  $\nu$  は後続型だったから、 $\alpha + 1 = \nu$  となる  $\alpha < \nu$  を取ると  $\pi_{X_{\alpha+1}}(\mathfrak{A}_{\alpha+1})$  は  $Y_{\alpha+1}$  上 admissible、即ち  $\pi_{X_\nu}(\mathfrak{A}_\nu)$  は  $Y_\nu = X_\nu$  上 admissible である。よって  $X_\nu$  がコンパクトだから  $C := X_\nu \setminus \bigcup_{U \in \mathfrak{A}_\nu} \pi_{X_\nu}(U)$  は空でない閉集合。 $x_\nu := f(C)$  と置く。このとき  $y = (x_\alpha)_{\alpha < \nu} \in Y_0$  は  $y \notin \bigcup \mathfrak{A}$  を満たす。

∴) ある  $U \in \mathfrak{A}$  が存在して  $y \in U$  となったとする。勿論任意の  $\alpha < \nu$  に対して  $x_\alpha \in \pi_{X_\alpha}(U)$  である。 $x_\nu = f(C) \in C = X_\nu \setminus \bigcup_{U \in \mathfrak{A}_\nu} \pi_{X_\nu}(U)$  だから  $U \notin \mathfrak{A}_\nu$  でなければならない。従ってある  $\alpha < \nu$  が存在して  $x_\alpha \notin \pi_{X_\alpha}(U)$  となり、 $x_\alpha$  の取り方に矛盾する。

□

系. 選択公理  $\implies$  Tychonoff の定理

□

系. 選択公理を使わずに次が証明できる.

1.  $[0, 1]^{\mathbb{N}}$  はコンパクトである.
2.  $n \in \mathbb{N}$  に対して  $|X_n| = 2$  のとき  $\prod_{n \in \mathbb{N}} X_n$  はコンパクトである.
3.  $p$  進整数環  $\mathbb{Z}_p$  はコンパクトである.

証明. (1)  $\mathbb{N}$  は整列可能である.  $\mathcal{A}_{[0,1]} \setminus \{\emptyset\}$  は選択関数を持つ.

$\therefore f : \mathcal{A}_{[0,1]} \setminus \{\emptyset\} \rightarrow [0, 1]$  を  $f(F) := \min F$  で定めればよい. ( $F$  は有界な閉集合だから, 最小値を持つ.)

故に定理から  $[0, 1]^{\mathbb{N}}$  はコンパクトであることが分かる.

(2)  $|X_n| = 2$  だから「 $A \in \bigcup_{n \in \mathbb{N}} (\mathcal{A}_{X_n} \setminus \{\emptyset\})$  で  $|A| \geq 2$  となるもの」は  $A = X_n$  しかない. 故に  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  の選択関数が存在すれば  $\bigcup_{n \in \mathbb{N}} (\mathcal{A}_{X_n} \setminus \{\emptyset\})$  も選択関数を持つ事が分かる.

(i)  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  の選択関数があるとき,  $\mathbb{N}$  は整列可能だからよい.

(ii)  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  の選択関数がないとき,  $\prod_{n \in \mathbb{N}} X_n = \emptyset$  はコンパクトである.

(3)  $\mathbb{Z}_p \subset \prod_{n=0}^{\infty} \mathbb{Z}/p^n\mathbb{Z}$  は閉部分集合である. 1 と同様にして  $\prod_{n=0}^{\infty} \mathbb{Z}/p^n\mathbb{Z}$  はコンパクトだから, 閉部分集合  $\mathbb{Z}_p$  もコンパクトである. □

2 の  $|X_n| = 2$  を  $|X_n| = 3$  に変えた命題, 即ち「 $n \in \mathbb{N}$  に対して  $|X_n| = 3$  のとき  $\prod_{n \in \mathbb{N}} X_n$  はコンパクト」は選択公理無しには証明できない. 何故ならば, 次の定理が成立するからである.

定理 2. 正整数  $m$  に対して, 次が成り立つ.

$n \in \mathbb{N}$  に対して  $0 < |X_n| \leq m$  のとき  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  は選択関数を持つ.

$\iff n \in \mathbb{N}$  に対して  $|X_n| \leq m + 1$  のとき  $\prod_{n \in \mathbb{N}} X_n$  はコンパクト

証明. ( $\implies$ )  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  が  $|X_n| \leq m + 1$  を満たすとする.

(i)  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  の選択関数がないとき.

このときは  $\prod_{n \in \mathbb{N}} X_n = \emptyset$  はコンパクトである.

(ii)  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  の選択関数があるとき.

$\bigcup_{n \in \mathbb{N}} (\mathcal{A}_{X_n} \setminus \{\emptyset, X_n\})$  の元  $A$  は  $0 < |A| \leq m$  を満たす. よって  $\bigcup_{n \in \mathbb{N}} (\mathcal{A}_{X_n} \setminus \{\emptyset, X_n\})$  は選択関数を持つ.  $\{X_n\}_{n \in \mathbb{N}}$  の選択関数とあわせれば  $\bigcup_{n \in \mathbb{N}} (\mathcal{A}_{X_n} \setminus \{\emptyset\})$  が選択関数を持つ事が分かる. 勿論添え字集合  $\mathbb{N}$  は整列可能だから, 定理 1 により  $\prod_{n \in \mathbb{N}} X_n$  はコンパクトである.

( $\Leftarrow$ ) 通常の「Tychonoff の定理  $\implies$  選択公理」の証明と同様にしてできる.  $\square$

## 2 Tychonoff の定理の別証明 2

次の命題を BPI (Boolean Prime Ideal Theorem) という.

命題 (BPI). 任意のブール代数は素イデアルを持つ.

命題. 選択公理  $\implies$  BPI  $\square$

命題. BPI を仮定すると, 以下が成り立つ.

1.  $\mathcal{B}$  がブール代数で  $\mathcal{F} \subset \mathcal{B}$  が有限交差性を持つとき, 超フィルター  $\mathcal{U} \subset \mathcal{B}$  で  $\mathcal{U} \supset \mathcal{F}$  となるものが存在する.
2. 位相空間  $X$  がコンパクト  $\iff$  任意の超フィルター  $\mathcal{U} \subset \mathcal{P}(X)$  が収束する.  $\square$

定理 3. 選択公理  $\implies$  Tychonoff の定理

証明.  $\{X_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$  をコンパクト位相空間の族として,  $X := \prod_{\lambda \in \Lambda} X_\lambda$  とする.  $\mathcal{F} \subset \mathcal{A}_X$  が有限交差性を持つとする. このとき BPI により, 超フィルター  $\mathcal{U} \subset \mathcal{P}(X)$  で  $\mathcal{U} \supset \mathcal{F}$  となるものが存在する.

$\mathcal{U}_\lambda := \{\pi_{X_\lambda}(Y) \mid Y \in \mathcal{U}\} \subset \mathcal{P}(X_\lambda)$  は超フィルターである. よって  $X_\lambda$  のコンパクト性と BPI から,  $C_\lambda := \{x \in X_\lambda \mid \mathcal{U}_\lambda \text{ が } x \text{ に収束する}\} \neq \emptyset$  である. 従って選択公理により元  $x = (x_\lambda)_{\lambda \in \Lambda} \in \prod_{\lambda \in \Lambda} C_\lambda \subset X$  が取れる. このとき  $x$  の任意の開近傍  $U \subset X$  に対して  $U \in \mathcal{U}$  である.

( $\cdot$ ) 任意の  $\lambda \in \Lambda$  と開近傍  $U_\lambda \subset X_\lambda$  を取る.  $\mathcal{U}_\lambda$  が  $x_\lambda$  に収束することと,  $\mathcal{U}_\lambda$  が超フィルターであることから,  $U_\lambda \in \mathcal{U}_\lambda$  が分かる. 故にある  $Y \in \mathcal{U}$  により

$U_\lambda = \pi_{X_\lambda}(Y)$  と書けるが、このとき  $Y \subset U_\lambda \times \prod_{\mu \neq \lambda} X_\mu$  である。  $\mathcal{U}$  がフィルターだから  $U_\lambda \times \prod_{\mu \neq \lambda} X_\mu \in \mathcal{U}$  となる。 よって、直積位相の定義から、任意の開近傍  $x \in U \subset X$  に対して  $U \in \mathcal{U}$  が分かる。

今、  $F \in \mathcal{F}$  が  $x \notin F$  を満たすと仮定する。すると  $X \setminus F \ni x$  は  $x$  の開近傍であり、よって  $X \setminus F \in \mathcal{U}$  である。  $F \in \mathcal{F} \subset \mathcal{U}$  だったから  $\emptyset = F \cap (X \setminus F) \in \mathcal{U}$  となり矛盾する。故に任意の  $F \in \mathcal{F}$  に対して  $x \in F$ 、即ち  $x \in \bigcap \mathcal{F}$  であり、  $X$  がコンパクトであることが分かった。  $\square$

系. BPI  $\implies$  コンパクト Hausdorff 空間の直積はコンパクト。

証明. 先の定理 3 で選択公理を使っている部分は三箇所ある。一つ目、二つ目は BPI を使っているところだから、BPI があればよい。三つ目は  $x_\lambda \in C_\lambda$  を取る所であるが、今  $X_\lambda$  は Hausdorff と仮定しているから、収束先は一意に定まる。故に選択公理を使わずに  $x_\lambda$  を取ることができる。  $\square$

## 参考文献

- [1] Horst Herrlich, Axiom of Choice, Springer, 2006
- [2] Peter A. Loeb, A New Proof of the Tychonoff Theorem, Amer. Math. Monthly, Vol. 72, No. 7 (1965), 711–717, <http://www.jstor.org/stable/2314411>